

H . Tさん（原告番号39）

第1、離別の状況

私は、H . Tといます。1993年5月帰国しました。生まれは、富山県黒部市です。

戦争中、父と母は、一緒に中国の吉林省図們市に行きました。当時、私は4歳です。

中国に行ったら、父はすぐに軍隊に取られ、残ったのは母と私の2人でした。

1945年8月15日、ソ連軍は、東北3省に侵入しました。当時、私は6歳です。

ソ連軍は日本人を見たらすぐに銃殺しました。母は、私を背負って避難しました。当時、食べ物もなく、中国人の農家の土地に入り、ジャガイモや生のトウモロコシを取って食べました。夜に、中国人の家に行き、食べ物を下さいとお願いしました。

その頃、日本人が生きていくのはとても難しいことでした。私は、母について覚えているのは、女であることを隠すために、母が鉄鍋の下にある灰を顔に塗って黒くし、髪の毛も男のように短く切っていたことです。ソ連軍に女と知られるのがこわかったからです。

天候はだんだんと寒くなり、食べ物も着る物もなく、生きていけないときに、母は中国人の男性と結婚しました。これは、1番目の養父皮さんです。皮さんの家に1年半くらい生活しましたが、不幸なことに、1947年5月頃、母は病気で亡くなりました。私は、母の胸にすがって泣いて、「お母さんー、お母さんー、お母さんー」と呼びました。それから何ヶ月も立たない内に、私は皮さんの家から外に追い出されました。私は、路上の生活を始めました。

その後、2番目の養父由さんに引き取られました。由さんには婚約者の女性がいて、その人が私のことを。日本鬼子と知って、由さんに私を追い出さなければ貴方とは結婚しないと仰いました。仕方なく、私は、また追い出されました。

当時は、冬でしたが、大雪で特別に寒いときで、一人の親切な中国人が私を引き取ってくれました。3番目の養父魏さんです。魏さん夫婦は、子供のない夫婦でしたが、1年半ほどで、養母に子供ができ、私は、又、魏さんの家も追い出されました。

このときも、大雪で1メートル位積もっていました。西北の風が強く吹き、体の骨まで凍りそうな寒さでした。3人の養父の間を転々としたときのことは今思い出しても、とても辛い。町の中のゴミの中に食べ物を探し、夜は、零下30度にもなり、寒くて寝るところもなく、仕方なく、田んぼの中の藁が積み上げてある中に潜り込んで寝ました。体を覆う着物もろくになく、両手両足は凍傷で、黄色い水(うみ)が浸み出していました。私は病気になり道路に倒れて動かなくなりました。中国政府の方が私を病院に連れて行き治療してくれて、その後、病気が治ったら、政府の人の紹介で中国人の養父方さんに引き取られました。

4番目の養父母方さん夫婦は娘が3人いて男の子がいなかったもので、本当に私のことを実の息子のように面倒を見てくれました。

第3、帰国状況

1993年5月4日、やっと自分の国に帰れ、日本・富山県・氷見市に戻りましたが、自分の戸籍が戦時死亡宣告で消されていたことを初めて知りました。ショックでした。

実は、帰るまでの間にも苦労しました。私の親類は、私が永住帰国する保証人になってくれませんでした。自分でやっと保証人を見つけたら、厚生省から、富山人でないと保証人になれないとして断られました。1990年2月に訪日調査に参加し、身元が判明しました。でも、いとこや叔父は私の帰国に協力してくれずに、身元保証人になってくれませんでした。自分で一生懸命、身元引受人を探しましたが、本籍地の富山県の人でないからだめと厚生省に断られました。この結果、帰国永住が訪日調査の後、3年間遅れました。

私は帰国して4日目から富山県の身元引受人の会社で働かされま

した。1日の給料は4500円と安くて、つらい日々の生活でした。一生懸命働いても、本当に少ししか給料は上がりませんでした。1年間のボーナスは2万円でした。日本人として帰ってきたのに、日本語は分かりませんでした。言語の障害で、仕事も難しかった。本当に辛い生活でした。

でも、給料が安くてもなんでも、どんなことでも身元引受人の言うことは聞かなければなりません。私は身元引受人には頭が上がりませんでした。

自分の国に帰りましたが、良かったのかどうか、逆に、新しい悩みとつらさがあります。

以 上